

六ヶ所村女たちのキャンプの民主主義

Doing Democracy in Women's Camp in Rokkasho-mura

安藤 丈将*

Takemasa ANDO*

要約:1991年9月、青森県上北郡六ヶ所村で、核燃料サイクル工場へのウラン搬入を阻止するために、女性たちがキャンプを張った。本稿は、この「六ヶ所村女たちのキャンプ」について考察する。参加者の多くは、六ヶ所村から離れて暮らしていたが、自分が直接被害を受けるわけではないにもかかわらず、なぜ抗議行動に加わり、何を問題にしようとしたのか。その問題意識を探るとともに、最近の民主主義論の成果を用いながら、女たちのキャンプの実践を読み解いていく。感情や個性のような女性に固有とされる徳性の否定的な理解を読みかえ、脱原発の思想を練り上げること。友情という非公式の政治的資源を利用しながら、より深い政治的コミュニケーションをつくり出すこと。非暴力直接行動の中に、他者への依存の許容と気づかいを組み込むこと。以上の点について論じながら、本稿では、女たちのキャンプではいかなる民主主義が実践されたのかを明らかにする。

はじめに

「いよいよ座り込みの前段階合図の歌が流れて、私たちが花を道路に並べ始めると、市民グループ、農業者も花を運んで手伝いはじめた。輪になって手をつないだとき、人数は五十人にも増えていた。そのまま歌いながら座り込んだが、誰も抜けていこうとしない。警告にも動ぜず、排除されるまでその場にとどまった。花はたちまちかたづけられ、ゲートは警官に固められて近づけない。打ち合わせ通り、バラバラに道路を歩き出した。三人、五人と手をつなぎ、警官の制止をかわしながら車道をジグザグに歩いていくと、先導のパトカーが立ち往生していた。道路いっぱい広がった

*武蔵大学社会学部教員

人たちはいっせいに座り込む。重量級の Tさんはパトカーのボンネットにあでやかに腰かける。隣の方はダイ・インしている。私もおそろおそろの仰向けになった。力を抜いているとあつという間に歩道に運ばれてしまった。警備のスキについては座り込み、寝転ぶ。野辺地警察は紳士的だった。声はあくまでおだやかに、妊娠している人、あかちゃんを抱いている人は四人がかりで運んでいる¹⁾」。

1991年9月27日の午後4時ごろ、青森県上北郡六ヶ所村のウラン濃縮工場前で、ウランを載せたトレーラーが工場に入るのを、核燃サイクル計画の抗議者たちが阻止しようとした。この行動を組織したのは、数週間前から村内でキャンプをしていた「六ヶ所村女たちのキャンプ」の参加者である(以下、「女たちのキャンプ」と略記)。トレーラーは30分ほど立ち往生し、座り込みが排除された後、工場内に入っていった。

本稿は、この女たちのキャンプについて考察する。1980年代半ば以降、六ヶ所村は、核燃サイクル計画という一大国家プロジェクトをめぐる争いの舞台となってきた。核燃サイクルとは、使用済みの核燃料を再利用するというもので、国家の原発政策やエネルギー政策の要という位置を与えられてきた。このプロジェクトが現地住民の生活に大きな影響を及ぼすがゆえに、激しい反対運動が展開されたのである。

これまでの六ヶ所村核燃サイクル計画への反対運動に関する研究では、現地の住民、とりわけ核燃サイクル施設の建設によって生業を脅かされる漁民や農民に主たる焦点が当てられてきた(船橋ほか1998; 船橋ほか2012)。しかし核燃に反対していたのは現地住民だけでなく、都市住民も抗議行動を組織し、参加してきた。六ヶ所村から離れて暮らす人びとは、自分が直接被害を受けるわけではないにもかかわらず、なぜ抗議行動に加わり、何を問題にしようとしたのか。その問題意識を探るのが、本稿の一つ目の課題である。特に女たちのキャンプの抗議が直接行動という形態をとったことは、注目に値する。後述するように、直接行動とは、資金や人材のような政治的資源に乏しい人びとが公共圏に批判的な見解を示す手段

である。それは、キャンプの参加者のように、国家の政治的交渉にアクセスできない人びとにも平等に自らの考えを発信する方法を提供する。女たちのキャンプの問題関心を探る中で、本稿では直接行動の多様な実践が持つ意味を考察する。

本稿のもう一つの課題は、「民主主義」に関する理論的な研究に基づいて女たちのキャンプの行動を理解することである。最近の民主主義論では、民主主義という言葉の多義的な理解に注目が集まっている。その言葉の意味は、選挙を通じての代表の選出という、もっともよく知られているものにとどまらない。たとえばドナテラ・デラポルタは、「参加」と「熟議」という鍵となる概念を軸にしながら、民主主義を投票という狭い枠内に押し込めることなく、その実践の幅を広く捉えている (della Porta 2013)。こうした研究動向を踏まえながら、本稿では、女たちのキャンプがいかなる民主主義を実現しようとしたのかについて考察していく。女たちのキャンプの検討を民主主義のより深い理解につなげるのが、本稿のねらいである。

本稿全体は、4つの節から構成される。1節では、1991年9月に六ヶ所村の工場にウランが搬入されるまでの経緯を1970年代のむつ小川原開発から、特に1980年代後半以降の核燃サイクル計画に対する推進側と反対側の攻防に注目しながら整理する。2節でキャンプが女性限定で行われたことの意味を考察した後、3節と4節では、友情、依存、気づかいといった民主主義論の鍵概念を使いながら、キャンプの民主主義の形を浮き彫りにしていく。資料は、公刊された文献に加え、当時の参加者のインタビューを使用する。文中で敬称はすべて略とする。

1. 核燃サイクル計画をめぐる攻防

1.1 核燃問題と村の分裂

六ヶ所村は、国の大規模開発計画に振り回されてきた。1980年代後半に核燃サイクル計画がやって来る前にも、村はむつ小川原開発の計画に揺

り動かされた。この計画は、最初、1968～69年にかけて、青森県と東北地方の経済界によって立案されたものである。開発計画には、臨海工業地帯、石油備蓄基地、原子力エネルギー基地の建設が含まれていた(船橋ほか2012:21)。むつ小川原開発の計画と並行する形で、政府は新全国総合開発計画を打ち出し、1969年5月30日に閣議決定された。これは、新幹線などの高速交通のネットワークを全国に張り巡らし、それによって大都市から遠く離れた場所に配置した工業基地、畜産基地、レクリエーション基地を結ぶという、遠大な構想であった(船橋ほか2012:22)。中央と地元の後押しを受けながら、青森県、北海道東北開発公庫、民間企業の出資で、むつ小川原開発株式会社が1971年3月に設立された。この会社が資金を集め、開発地域の土地を買い、それを工業用地として造成し、進出企業に売却することで、開発計画が実際に動き出したのである(船橋ほか2012:24)。

開発計画が進むにつれ、六ヶ所村内の核燃計画の推進派と反対派が、村を二分して激しく争うようになった。1973年1月、六ヶ所村むつ小川原開発反対同盟が橋本勝四郎村議にリコール手続きを行なったのに対して、開発推進派は、寺下力三郎村長へのリコール手続きで返した。混乱の中で行われた同年12月の村長選では、推進派の古川伊勢松が寺下を僅差で破った(船橋ほか2012:28-29)。時を同じくして、開発用の土地の買収が本格化していく。1973年末までに開発区域内にある民有地の7割が買収されたが(船橋ほか2012:26)、石油危機後、世界経済の情勢が変化し、日本でも、経済のトレンドが「重厚長大」型の量的拡大志向から、「省エネ・省資源・知識集約化」に移っていくと、政界と財界の関心は、石油化学コンビナートを柱としたむつ小川原開発から離れていく。結局、当初予測されたほどには工業立地は進展せず、広大な工業用地が放置されてしまったため、地域住民の多くは、生活の糧を求めて出稼ぎに出ることを余儀なくされた(船橋ほか2012:29-30)。

むつ小川原開発が予定通りに進まず、経済振興のプランが宙に浮いた形

になった六ヶ所村にやって来たのが、核燃料サイクル施設の建設計画である。核燃料サイクル構想とは、原子力発電の燃料になるウランを原子炉の中で燃やした後、プルトニウムと燃え残りのウランを回収し、それを高速増殖炉などで核燃料として再利用するというものであった(船橋ほか2012:38)。核燃料サイクル施設には、ウラン濃縮工場、低レベル放射能廃棄物貯蔵施設、高レベル放射性廃棄物一時貯蔵施設、使用済み核燃料再処理施設が含まれ、当初はこれら四つの施設がすべて六ヶ所村に建設されることになっていた(船橋ほか2012:40)。

1984年1月1日付の『日本経済新聞』でむつ小川原に核燃料サイクル基地を建設するという政府の計画がスクープされると、六ヶ所村は再び揺れ動かされることになった(船橋ほか2012:35)。むつ小川原開発計画の時点で、建設予定地周辺の用地買収も漁業補償も完了していたため、県議会でも村議会でも明確に反対を表明する者は少数であった。しかし1985～86年の海域調査に際して、漁民を中心に反対が出る。特に六ヶ所村の中で最大の泊漁協には、核燃料サイクル計画に対する抗議行動が広がっていった(船橋ほか2012:52)。こうして核燃問題をめぐって、再び六ヶ所村は分裂を強いられることになった。分裂が浮き彫りになったのが、1989年12月10日の村長選である。この選挙では、現職の古川伊勢松と前村議の土田浩が立候補した。古川候補が核燃推進の姿勢を明確にしたのに対し、土田候補は計画の「一時凍結」を打ち出した。ジャーナリストの明石正二郎によれば、両者の対立の根本には、六ヶ所村の開発の利権の分配をめぐる争いがあったため、村議も土建業者も古川派と土田派に割れることとなる(明石1991:101)。

さらに、核燃反対派も分裂した。村内の漁民を多く抱え、もっとも激しい反対運動を展開した泊地区では、凍結路線の土田氏を推すかどうかで割れた。前回の村長選に核燃反対を掲げ、善戦をした滝口作兵衛村議らは土田支持に回り、元村長の寺下力三郎らは村内の反対派「核燃から漁場を守る会」の会長である高梨酉蔵を擁立したのである(明石1991:107)。核

燃賛成と反対の両者を含む、村内の幅広い支持を得た土田氏は、選挙に勝利して村長に就任した後、「凍結」が「ゆるやかな推進」であったとして、核燃料サイクルの操業を開始し、建設工事の進捗に協力的な姿勢をとった(船橋ほか 2012 : 222)。こうして村長選は、反対派の中に失望感を、村民の中に深い亀裂を残した。

1.2 核燃問題の都市部への広がり

村長選と同じ時期、都市部では原発に対する抗議行動がかつてないほど高まっていた。1986年4月26日のチェルノブイリ事故後、特に1988年には、伊方原発出力調整実験に対する抗議行動をきっかけに、都市住民が中心になって反原発の世論をつくり出していた。「ニューウェーブ」と呼ばれた脱原発運動の広がりとともに、核燃サイクル計画も六ヶ所村だけでなく、全国的な問題として注目されるようになる。それを象徴するのが、1989年4月9日、六ヶ所村尾駮沼の舟だまり隣接地で開かれた反核燃行動である。4月9日というのは、その4年前の1985年に青森県が県議会全員協議会で核燃受け入れを決定した日であり、1986年以降、この日には反核燃のイベントが行なわれるのが恒例になっていた。1989年の行動では、過去最高の約1万1千名が参加し、県内の労組だけでなく、幅広い参加者を獲得した²⁾。

「ニューウェーブ」は、都市住民を顧客にする農業者の行動に影響を及ぼした。購買・医療生協16組合から構成され、組合員約17万人を有していた青森県生活協同組合連合会は、1988年11月22日に青森市の県教育会館で開かれた生協大会で、核燃サイクル施設建設への反対を決議している³⁾。消費者団体の中には、核燃施設が完成したら放射能汚染の恐れがある青森県の産物を買わないという通告をするグループも出てきた⁴⁾。このように「ニューウェーブ」の運動は、青森の農業者を反核燃へと方向づける圧力となったのである。

北村正哉知事の対応のまずさも、農業者の反核燃に向かわせた要因の一

つである。1988年4月27日、県農林部出先機関長会議の席上で北村知事は、「核燃サイクル施設は農家のことを考えて受け入れた。農家のための開発を拒否すれば、かたくなに先祖伝来の土地だけを守る哀れな道をたどるだろう」と発言した。このような知事の居丈高な発言は農業者の怒りを買ひ、農業者は反核燃の姿勢を鮮明にすることになった⁵⁾。

農業者は1988年1月に「ストップ・ザ・核燃 100万人署名運動」を始めていたが、都市部での動員の高まりのタイミングと重なったため、わずか3ヶ月で14万6千人の署名を集めるのに成功した(船橋ほか2012:56)。さらに、1988年11月22日には、県農協青年部、同婦人部、全国農業者農政運動組織連盟(農政連)、農協労組からなる核燃料サイクル施設建設阻止農業者実行委員会が、青森市で総決起集会を開催する。約1900名の農業者がこの集会に参加し、予想を上回る盛会は、自民党や電気事業連合会(電事連)を驚かせた(明石1991:18)。11月25日、第18回青森県農業協同組合大会では、県農協青年部の組合員から核燃反対の動議が提出され、他の組合員もこの動議に賛同した。大会の運営側や組合執行部と青年部との間の激しいやり取りを経て、最終的には、12月27日の「県農業者・農協代表者大会」で、核燃白紙撤回動議が可決された(明石1991:20)。

1.3 1991年の県知事選とその後

このように都市の反原発運動の波を受けながら、青森県の農業者の自民党離れが加速した。この時期にはリクルート事件や消費税導入などもあって、全国的に自民党に逆風が吹いていた。盛岡以北の新幹線の着工の遅れも相まって、自民党県連は内部に混乱を抱え込んでいたのである(明石1991:30)。農業者にとっては、核燃問題だけでなく、農政に対する不満も、自民党離れを引き起こす要因であった。特に青森では、米や農産物の貿易自由化による産地間競争の激化が予測されたため、農業者は将来に不安を抱えていた(船橋ほか2012:237)。

1989年7月23日の参院選では、弘前近郊の相馬村のリング農家で、農協の政治組織である農政連の会長を務めていた三上隆雄が核燃阻止を訴え、35万3892票(得票率52%)を獲得して勝利した(船橋ほか2012:58)。自民党は分裂選挙になったが、立候補した松尾官平と高橋長次郎の票を足しても三上の得票数に遠く及ばなかった。保守系の候補者は酒瓶をぶら下げて家々を回ったのに対して、三上陣営はカンパを集めに回った。それほど資金力には差があったにもかかわらず、三上は大勝したのである(明石1991:49)。青森県における自民党支配の動揺は、誰の目にも明らかであった。

このような中、1991年2月3日に予定された青森県知事選は、かつてないほどの注目を集めた。知事選の結果次第では、核燃の賛否をめぐる県民投票もあるかもしれない状況になっていたからである⁶⁾。当日の投票率は県全体で66.46%、1947年に行なわれた第1回の知事選時の77.3%に次ぐ、史上二番目に高い投票率であり、直前の1987年の知事選に比べると18.16ポイントも高かった(木村1998:90)。この選挙では、現職で核燃推進、自民党公認の北村正哉が、参院議員を辞職して出馬した山崎竜男、さらには核燃反対を唱える金沢茂を破った。北村は32万5985票、山崎は16万7558票、金沢は24万7929票という、三つ巴の接戦であった。

危機感を強めていた自民党は、小沢一郎幹事長を中心に巨額の選挙資金を投じ、電力業界も人材と資金を総動員して、北村を支援した。たとえば電事連は、1991年1月28日、「キャンペーン・ダイナミクス社」という広告代理店に対して、福岡と横浜で開くコンサートへの協賛金名目で1億2千万円以上を支払ったと言われている。同社は翌日付けでアントニオ猪木参院議員と名誉プロデューサーに就任する契約を結び、猪木が党首のスポーツ平和党に1億円支払うという合意書を作成した。猪木は、凍結派の山崎竜男候補への応援の約束をキャンセルし、2月1日に自民党や電事連が推す北村正哉候補の応援演説を行なった⁷⁾。こうしたカネをめぐるやり取りに、六ヶ所村も無関係ではなかった。それ以前から村では村議に当選するのに、初回で2千万円、2期目以降は1千万円が必要と言われていた。

1票4万円とも言われるカネが、選挙のたびに動いてきたのである（船橋ほか2012:219）。

他方で反核燃陣営では、知事選の候補者選びをめぐる混乱が起きていた。当初、反核燃の統一候補として有力であったのは、五所川原市七和の農協組合長で農政連委員長の上三光男である。しかし最初は社会党が難色を示し、その後、八戸市と青森市の住民を中心に構成される一万人訴訟原告団、脱原発・反核燃青森県ネットワーク、りんごの花の会の三つの市民団体が「三上氏では勝てない」という理由で擁立に反対した⁸⁾。結局、土壇場になって候補に選ばれたのが、弁護士の金沢茂であった。結果的には、南部地方の市民グループと社会党が津軽地方在住の上三を候補者から引きずりおろす形になり、地域対立の様相をなしてしまった⁹⁾。こうして、津村浩介が指摘するように、選挙期間中も反核燃陣営の中に「ここまできたら仕方がない。やるしかない」という開き直りに近いしらけたムードが漂うことになった¹⁰⁾。

知事選後の1991年2月24日、山崎竜男の知事選出馬に伴う参院補選が行われた。1989年の参院選で上三隆雄に敗れた松尾官平が、「核燃サイクル施設建設阻止農業者実行委員会」の委員長であった久保晴一を破り、当選した。さらに自民党の快進撃は続き、4月7日の県議選では、30議席から32議席に増やした。社会党は7議席から1議席に大幅減、共産党に至っては3議席をすべて失い、1963年来の議席ゼロとなってしまった。翌日の『東奥日報』の1面に書かれたように、この選挙で「革新が歴史的な大敗したのである。

こうした政治情勢は、核燃サイクル計画推進の追い風になった。核燃サイクル事業の運営にあたる日本原燃産業が、関係する自治体との間に次から次へと安全協定を締結していく。7月25日に、原燃は県と六ヶ所村と締結、三沢、野辺地、東北、横浜、上北、東通の隣接六市町村とも9月10日に締結した¹¹⁾。この段階では核燃サイクル計画を阻むものが、もはや存在しないような状況であった。9月26日午前、六フツ化ウランが東

京の大井ふ頭に着岸し、トレーラーに積まれ、陸路でウラン濃縮工場に運ばれる。ウランが六ヶ所村にやって来る日が、刻一刻と近づいていた¹²⁾。

2. 「女たちから、女たちへ」

2.1 直接行動が選択されるまで

核燃サイクル計画への反対運動は、制度政治にどれだけアクセスできたのだろうか。この計画を中心となって進めてきたのは、与党自民党と関係省庁であり、社会党は核燃サイクルに反対の立場をとっていたが、一野党だけでその政策を変更させられるほどの影響力はなかった。1970年代以降、電力会社が電源開発調整審議会に原発計画を申請する際、通商産業省は、立地する市町村に協力を申し入れ、都道府県知事の同意を得ることを慣行にしてきた。北海道の横路孝弘知事が1980年代後半に幌延町への高レベル核廃棄物貯蔵工学センターの立地を拒否したことに象徴されるように、道府県知事の賛否は重要な政治的争点とされてきた(本田2005:25-26)。しかし六ヶ所村村長が「凍結」という名の「緩やかな推進」路線に

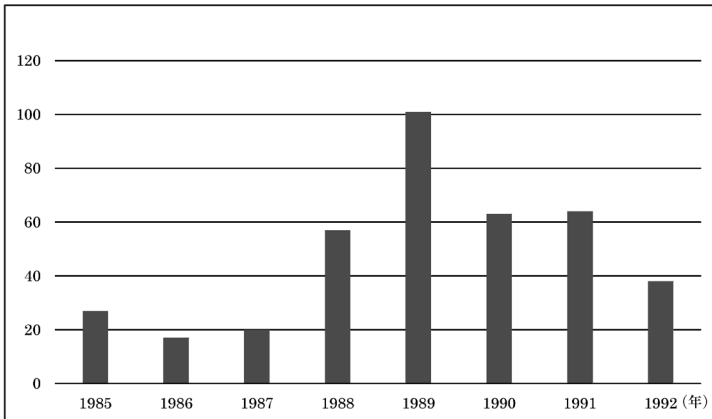


図1 『朝日新聞』の東京版に掲載された核燃サイクルに関する記事数

走り、1991年の選挙に勝利した北村知事が核燃サイクル推進を明確に打ち出している以上、反対運動が自治体の首長を介して主張を反映させる道は、この時点では事実上閉ざされていた。

運動が政治に影響を与えるもう一つの重要な回路であるメディアはどうか。原発推進のような国策に関する世論を形成するうえで決定的な影響力を持っていたのは、全国紙である。『朝日新聞』の全国版と東京版に掲載された青森の核燃サイクルについての記事の数をみると、東京在住の読者がどれだけ核燃に関する記事を目にしていたのかがわかる(図1)。1985年には27、86年には17、87年には20であったが、「ニューウェーブ」の運動が盛り上がる88年には57、89年には101にまで伸びる。1990年には63、91年には64に減少し、92年には38になる。この数字は、「ニューウェーブ」の運動の後退とともに、核燃に関する記事が減り、注目度が落ちていったことを示している。

こうして知事選後、六ヶ所村には、核燃サイクル計画の進行が既定路線であるかのようなムードが漂っていた。核燃の賛否をめぐってそれまでに繰り広げられた激しい争いは、地元住民の心に深い傷を残してきた。1991年知事選の際、泊まり込みで金沢陣営を支援に行き、その後、女たちのキャンプを中心となって担った小木曾茂子は、地元の住民から「古い傷に触れないでほしい」と言われたり、核燃に反対するのは「この辺がどれほど貧しかったのかを知らないからだ」と言われたりしたと語っている¹³⁾。このような状況では、知事選後に六ヶ所村で核燃サイクルの是非をもう一度問題にするのは、極めて困難になっていた。議会にもメディアにも期待できず、現地の反対運動も停滞する中、女たちのキャンプの参加者たちは、座り込みという非暴力直接行動の手段をもって、ウラン燃料の搬入を阻止しようとしたのである。私が以前に論じたように、直接行動とは、資金、人材、時間、知識、権力者との関係のような政治的資源に乏しい人びとが公共圏に批判的な見解を示す手段である(安藤2012:14)。すなわち、それは、女たちのキャンプの参加者のように、国家の政治的交渉にアクセスする術

を持たない人びとにも自らの考えを発信する方法を提供するのだ。

2.2 女性限定のキャンプ

1990年12月、六ヶ所村で核燃に反対する女性たちの集いが開かれ、そこに参加した人びとが翌年8月10～16日の祭りで再会したり、新たな参加者との出会いがあったりした。この祭りには初日に1000人、最終日に3000人が参加し、主に若い世代が六ヶ所村で1週間キャンプをしながら、歌やダンスを楽しんだ¹⁴⁾。この時期、日本のカウンターカルチャーの担い手が自然豊かな場所で開かれる野外イベントに集まるのが恒例になっていた。1988年8月1～9日、八ヶ岳南西麓のスキー場で開かれた「いのちの祭り」は、その中でもよく知られている。「ニューウェーブ」の脱原発運動の盛り上がりを背景に、「NO NUKES ONE LOVE」の合言葉のもと、6千人の、それ以上とも言われる参加者たちが、野外でキャンプ生活をしながら、ミュージシャンのパフォーマンスを楽しみ、環境破壊や原発の問題について語り合った¹⁵⁾。

1990年には鳥取県の大山が会場になり、1991年の六ヶ所村でのイベントは、この二つの祭りに引き続いて行われたものであった。ここでは核燃サイクル計画に疑問を持った女性たちが連日連夜、ミーティングを重ねた。北海道札幌市在住で、女たちのキャンプに企画の段階から関わった谷百合子にとっては、「初めてウランが搬入される。六ヶ所村が汚される。それがどうしても嫌だった」というのが、参加の動機であった¹⁶⁾。そういう思いを共有する人びとによる話し合いの場で、オーストラリアのタスマニアから来ていた女性が自分の国の経験を話しながら、女性だけでキャンプをすることを提案し、その提案が実行に移された。

女たちのキャンプの中でお手本にされたのは、イギリスのバークシャー州にあるグリーンナムコモンの女たちのピースキャンプである。1979年12月、NATO(北大西洋条約機構)がヨーロッパ5ヶ国に核ミサイルを配備することを決定し、アメリカの巡航ミサイルがグリーンナムにも配備される

計画が明らかになると、計画に反対する数千名の女性たちが同地でキャンプを始めた(Alice and Kirk 1983=1984 : 9)。参加者たちは、24時間、巡航ミサイルを監視しながら、フェミニズムの思想の影響のもとに、自分たちの日常的な問題を語り合った(Alice and Kirk 1983=1984 : 4)。グリーンナムのピースキャンプは世界中に知れ渡ることとなり、日本でも1985年には『Carry Greenham Home』(ビーバン・キドロロ監督、1983年)という映画が『グリーンナムの女たち』というタイトルのもと、近藤和子の翻訳で公刊された。さらに、アリス・クック&グウィン・カークの『グリーンナムの女たち一核のない世界をめざして』(八月書館、1984年、近藤和子訳)も、日本語で読めるようになっていた。

「女たちから、女たちへ 9月10日～10月6日 女たちのキャンプ 六ヶ所村へ」というタイトルの呼びかけ用のチラシには、申込書が付いていて、そこには次のように記されている。「9月中旬すぎにも六フッ化ウランが搬入され、ウラン濃縮工場が動き出します。私たちは、お金も力もない、ごくふつうの女たちですが、このウラン搬入をどうしても黙って見過ごすことができません。生命を生み、育む性をもって生まれた女たちが、自分たちの言葉で、やり方で、核燃はいらない、と行動してみたい、その為のキャンプです。あなたの参加をお待ちしています」。呼びかけ人になったのは、88人の女性である。居住地は全国に散らばっているが、特に福島、北海道、千葉の在住者が多い。これは中心となって組織した参加者の地元でのつながりによるものと考えられる。さらにチラシには、キャンプの目的として、「六フッ化ウラン搬入の監視行動。原燃、電力への抗議、核燃反対の意志表示」が挙げられていた。

2.3 キャンプの生活

1991年9月10日、女たちのキャンプが幕開けした。翌日、八戸市を中心に読者を持つ新聞の『デーリー東北』には、「上北郡六ヶ所村のウラン濃縮工場への天然六フッ化ウランの輸送搬入が九月中に予定されている

が、この輸送に抗議する市民グループが十日、同村新納屋に輸送監視のためのキャンプを設置した。キャンプは十月六日まで続けられる予定」であり、「市民グループのキャンプは女性たちを中心とした「女たちのキャンプ六ヶ所村」で、「ウラン輸送沿線住民ネットワーク」(竹村英明代表)とも連携して東京・大井ふ頭に陸揚げされる六フツ化ウランの輸送を監視する」という記事が掲載された¹⁷⁾。

1ヶ月近くに及ぶキャンプでの生活は、どのようなものであったか。まず、キャンプの場所に関しては、国道338号線沿いに位置している新納屋の小泉金吾の自宅横にある空き地の使用許可をもらった。小泉は、むつ小川原開発計画の線引き内にあった新納屋部落の中でただ一人自宅を売らず、田んぼを守り、核燃反対運動を続けてきた人物である(菊川2010:147-148)。この小泉が所有する空き地に、全国各地からやってくる参加者がテントを張って寝泊まりした。野外でのキャンプには、困難も伴った。青森で9月にキャンプをするとすると、台風を避けて通ることはできない。キャンプ中の風の強かった夜に、テントが飛ばされ、朝起きたらテントがなくなっていたということもあった¹⁸⁾。このように、野外でのキャンプに伴う不便こそあったが、参加者は口々にキャンプの食事が充実したものであったと語っている。地元の農業者や漁業者が差し入れを持ってきてくれたからである。差し入れられたのは、イカやサケなど、地元でとれた新鮮な魚介類、さらには地元の名産の根菜類を含む、新鮮な野菜であった。

参加者は、通いの者、そこに長期で滞在した者、そして地元の支援者に分かれる。通いと長期滞在者はキャンプに寝泊まりしたが、地元支援者は日常の雑事の中、時間をつくって参加し、夜には自宅に戻るという生活を送った。たとえば、六ヶ所村の出身で、1990年に村に戻り、核燃反対運動に関わっていた菊川慶子は、参加者の移動時の運転手、地元の土地勘をきかせてのチャシ配り、さらにはマスコミへの電話連絡が主たる仕事であったと言っている¹⁹⁾。遠方の自宅から通って来る者もいた。福島県在住で地元の脱原発運動に関わっていた武藤類子は、平日、福島県郡山市で養

護学校の教員の仕事をして、金曜の夜、仕事が終わってから車を飛ばし、土日を六ヶ所村で過ごし、日曜の深夜にまた車で戻るということを、キャンプの期間中に三、四回繰り返した²⁰⁾。

2.4 女性と脱原発

女子たちのキャンプの最大の特徴は、参加者が女性限定ということである。反原発「ニューウェーブ」において中心的な役割を担ったのは、女性である。長谷川公一の調査によれば、「ニューウェーブ」の運動の担い手は、「育児期」を終了した、もしくはその直前の女性であった。1989年時点で35～44歳になる、1945～54年（昭和20年代）生まれがけん引役となっており、そこを中心に20～60歳代の人びとが参加していた（長谷川1991：49）。

長谷川は、この運動への参加者の少なくとも過半数程度が主婦であったと見ている（長谷川1991：50）。内閣府男女共同参画局の『男女共同参画白書（平成23年度版）』の資料によれば、「ニューウェーブ」の運動が盛り上がった1988年に「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」は946万世帯であったのに対し、「雇用者の共働き世帯」は771万世帯であった。1980年の1114万世帯に比べると減少しているが、共働き世帯よりも多く、1980年代後半に「主婦」というのは依然として明確に目に見える社会層であったことがわかる。専業主婦や自営業者として地域社会で生活する女性の中には、比較的自由に時間をやりくりできる環境にある者も多かった。この恵まれた経済的、文化的な資源を生かして、主婦は脱原発運動において中心的な役割を果たしていたと想定される（長谷川1991：50）。

注意すべきなのは、「ニューウェーブ」運動の中では目立つ存在の女性が、それ以外の運動の中では周辺的な存在であったということである。たとえば武藤は、運動の集会の中で女性に与えられる役割には、集会アピールを読むといった花を添えるようなことが多かったと語っている。これに対して男性は、行動提起のようなことが担当であり、暗黙の役割分担のようなものがあって、彼女はそれに疑問を感じていた²¹⁾。1990年の秋に六ヶ所

村に移り住んだ写真家の島田恵が、写真を撮ることを仕事に選んだのは、写真の世界が性別に関係なく実力勝負と考えたからである。しかし実際には仕事場にカメラを持っていった時に、「女のカメラマンが来たのか」と言われたこともあった。そんな彼女は、原発や核燃への反対運動に関わる中で、その運動が持つ攻撃的な性格に違和感を覚えていた。特に気になったのは、機動隊に暴言を吐いたりする時に使われる、暴力的な言葉であった。島田が女性限定のキャンプの企画を聞いた時に共感したのは、そうした攻撃的な運動とは違うものをつくれるかもしれないと考えたからである²²⁾。

こうした女たちのキャンプの見方には、ウーマンリブの影響を見て取ることができる。1960年代後半、学生やベトナム反戦のグループからなるニューレフト運動は、大衆的な動員と支持の低下に直面した。そこで現状を打開する方法としてゲリラ戦のような武装行動が選択され、武装行動の効果を最大化するためにグループ内の性別役割分業が肯定された。男性は身体能力で勝るため、前線で戦闘要員として働き、その能力に劣る女性は、飯炊きやビラ作成や逮捕者の救護といった武装行動の補助的な活動を担うことが多かった(安藤 2013: 109)。こうした社会運動内部の性別役割分業の批判者たちは、日本のウーマンリブをつくり出していったのである。

ここで、フェミニズムの政治理論を参考にしながら、運動組織内部で女性が周縁的な位置を占めることが多い理由を考えてみよう。近代の支配的な政治・社会思想の中で暗黙の前提にされてきた公私二元論の考え方において、公的な場所として想定されるのは、国会や地方議会、大臣、内閣、政党、圧力団体、公共サービス、司法といったものである(Phillips 1991: 93)。公的領域に必要とされる徳性は、独立、一般性、冷静な理性であり、これらは男性に特有なものと思なされる。他方で女性に固有なものは感情、欲望、身体的ニーズであり、これらは私的領域にふさわしい徳性とされる(Young 1995=1996: 102)。特に後の議論との関係で注目すべきは、独立(independence)、すなわち、他者に依存しないことこそが男性的であり、公的領域にふさわしい振る舞い方と考えられていることである。

公的領域は理念上、すべての人の参加に開かれている。しかしそこでは、(白人) 男性的とされる徳性に従って振る舞うことが求められるので、女性やその他の集団が参入するには、自らその徳性に適応しなくてはならない。こうして形式的には平等であるにもかかわらず、排除され、不利益を押しつけられる集団が出てくる (Young 1995=1996 : 103)。そして社会運動の場も公的領域の一部である。ウーマンリブの中で指摘されてきたように、そこでもまた男性的な徳性が支配するがゆえに、女性はそこから排除される傾向があった。キャンプの女性たちに問題にされたのは、この公的領域の男性的な性格である。

女性が男性的徳性の支配する公的空間に現れるのは、容易ではない。そこでしばしば実践されたのは、男性の世界から切り離された自分たちの空間をつくることである。ジェーン・マンズブリッジは、この空間を「守られた飛び地 (protected enclaves)」と呼んでいる。この飛び地の中で、メンバーはお互いの経験を共有することで団結を強め、何が自分たちにとっての利益なのかを熟慮する。自己理解を深め、連帯をつくり出し、アイデンティティを共有するための飛び地を築くのは女性だけでなく、労働者や黒人のように社会的に不利な立場にある人びともそうである (Mansbridge 1996 : 57)。

以上の議論を踏まえたうえで、女性限定のキャンプの効果を考えてみよう。たとえば、谷は「女だけだと、肩書なしで、平場でやれる」と、武藤は「女風呂の気安さのようなもので、裸の付き合いをしながら、心と体の垢を落とせる」と語っている。男性的徳性が支配するものとは異なる空間をつくり出し、参加者が同じ目線で率直に話し合うことが、女性限定のねらいだったのだ。とはいえ、女たちのキャンプには、まったく男性が関わっていなかったわけではない。ウラン搬入阻止のために行動した男性アクティヴィストの中には、女性だけのキャンプを「逆差別」として批判する者もいたが、他方で、台風でテントが飛ばされた後にはテントを直しに来てくれるなど、表に裏にサポートしてくれる者も多かった²³⁾。

2.4 女性的徳性の読みかえ

先に触れたように、近代国家の公私二元論の世界では、女性的な徳性と見られてきたのは、感情、欲望、身体的ニーズである。女性には良き市民に必要な冷静な理性と独立性を欠くという理由で、公的領域の排除が正当化されてきた点を考慮すれば (Young 1995=1996 : 102)、支配的な政治空間では、女性的な徳性が否定的なものとして見られてきたと言える。これに対して、エコフェミニズムの思想の中では、女性的なものが肯定的に捉え返されている。マリア・ミースとヴァンダナ・シヴァは、世界各地のエコロジー運動で女性が中心的な役割を果たしていることを踏まえながら、女性が男性よりも環境破壊に積極的に抗議するのは、科学技術がジェンダー的に中立ではなく、それによって引き起こされるエコロジーの破壊が男性よりも女性の生存基盤に影響を与えてきたからであると言う (Mies and Shiva 1993 : 3)。男性は、近代科学の中で自然を搾取してきたのと同じように、家父長制の中で女性を抑圧してきた。それゆえに、地球と女性の身体の危機の根は、男性による支配にある (Mies and Shiva 1993 : 14)。シヴァは、世界各地で土地に根ざして暮らす女性を想定しながら、女性たちの気候、季節、作物、天候、土などの知識が、この危機を脱却するうえで重要な役割を果たすとしている (Shiva 1993 : 166)。

エコフェミの思想は、1979年3月、アメリカのペンシルバニア州にあるスリーマイル島で原発事故が起こった後、原発への抗議行動が広がる中で形成された (Mies and Shiva 1993 : 14)。日本の脱原発運動においてエコフェミ的な言説の象徴的なものは、甘蔗珠恵子『まだ、まにあうのなら』(地湧社、1987年)であろう。これは、福岡県在住の二人の子供を持つ主婦が、チェルノブイリ事故後に地湧社という出版社に送った一通の手紙を本にしたものである。多数の読者を獲得し、売り上げは50万部に達した。この本は、チェルノブイリ事故後の放射能汚染が食品にまで広がったことを嘆くところから始まる。甘蔗は、「生命を維持、生長させるために摂る」食べものに、「何年か何十年かのちには必ずその効果が現れてくるという毒」を混ぜて食べ

させなくてはならないことを嘆いている(甘蔗 1987: 8)。

甘蔗によれば、原発事故の原因は、経済的利益をひたすら追い求めたことにある。「この大自然のお恵みの中で生かされて生きているということをつか忘れ、欲望にひきずられ、目先のお金と権力のために原発のような暴力的、破壊的なものをつくり出し、結局、放射能をバラまいて我とわが身の首を締めている」(甘蔗 1987: 53)。彼女は、動物の世界でも、産んだ子の生命を守ろうとするのが、「母なるものの本能」であり、経済効率性ではなく、子どもたちの生命を守るために、原発を拒否し、そのために行動すると続けている(甘蔗 1987: 52)。

甘蔗の批判は、原発だけでなく、同時代の経済や社会のあり方に向けられている。こうした批判の展開は、主婦が運動の主体になったことと深く関わっている。この時期の多くの女性にとって、男性のように企業で活躍するのは、容易なことではなかった。厚生労働省の『平成 18 年度女性雇用管理基本調査』によれば、1989 年の役職別女性管理職の割合を見てみると、女性の割合は、係長相当職の 5.0%、課長相当職の 2.1%、部長相当職の 1.2%に過ぎない。この数字が示すように、女性は日本の経済社会の周縁に置かれていたが、そうであるがゆえにその社会のあり方を男性よりも批判的な目で捉えることが可能であった。そして男性的性格が支配する日本の経済社会を批判する軸になるのが、甘蔗が「母なるものの本能」という言葉で表現した女性的徳性であったのである。

女性的なるものを肯定的に捉え返そうとする視点は、女たちのキャンプの中にも見て取れる。たとえば谷は、次のように言っている。「戦争や原発も、大きなもの、強いものをよしとする社会の産物である。他者との戦いに勝ち残った男たちがつくり出したシロモノに他ならない。差別されてきた女性だからこそ弱者の立場が見えるし、痛みを共有しあえるのだ²⁴⁾」。女たちのキャンプにおいては、女性的徳性の意味を読みかえることで、原発とそれを生み出す日本社会の現状への批判が展開されたのである。

このような「女」や女性的徳性の捉え方は、近年のフェミニズム理論の

中で様々な批判にさらされてきた。その有力なものの一つは、ジュディス・バトラーによる批判である。バトラーによれば、「女」という主体そのものが、安定した永続的なものとは考えられなくなっている (Butler 1990=1999 : 20)。主体の問題が、フェミニズムにとって重要なのは、主体の形成に伴って生じる排除の問題が見えなくなり、結果として排除が正当化されてしまうからである (Butler 1990=1999 : 21)。すなわち、「女」というカテゴリーを前もって想定することで、その内部にある人種的、階級的、民族的、セクシュアリティ的な相違、亀裂、分裂、断片化に目をつぶってしまう (Butler 1990=1999 : 42)。

こうした「女」の一枚岩的な理解に対する批判は、「ニューウェーブ」の運動の中から実践的な形で提起されていたことを付記しておこう。1988年7月10日、脱原発運動の盛り上がりの最中、ウーマンリブの活動に関わってきた女性たちが、東京の総評会館の前で「いろんな女の反原発!」というビラをまいた (三輪 1989 : 137)。そのビラには、運動の中で、メディア上で、女性が「母」と括られていることに対する違和感が記されている。女性という存在は「母親」や「妻」に還元されるものではなく、もっと多様なものである。その多様さを大切にしながら、「一人の女」として原発に反対したい。この思いは、「フェミニストも、レズビアンも、ふつうの主婦も、子どものいる人もいない人も、みんなで「ふつうの女」の反原発をやりませんか」という言葉に表現されている (三輪 1989 : 141)。ここには、現在進行中の運動内での「女」の捉え方を批判しながらも、同時に「女」という言葉の肯定的な読みかえを保持し続けることで、その運動と切れずにつながっていこうという姿勢を見て取ることができる。

3. 友情と民主主義

3.1 「話すこと」と「聞くこと」

女たちのキャンプでは、他の政治的手段が失われてしまっている中で、

座り込みという直接的な行動を通して、核燃料サイクル計画をストップさせようとした。それでは、この直接行動にはいかなる政治的効果があったのだろうか。私は以前の研究で、社会運動にとってこの直接行動の効果を二つに分けて論じた。一つは公共圏へのアクセスであり、もう一つは参加者のエンパワーメントである。前者のねらいが聞き入れられない声を世論に届け、争点をつくり出すところにあるのに対して、後者のねらいは、参加者が無力感から抜け出し、政府のような権威を離れ、自律していくことにある(安藤 2013: 20-21)。

すでに現地での行動が中央のメディアを動かし、大きく報道させることへの期待が失われつつある中で、キャンプでの直接行動の主たるねらいは、エンパワーメント、すなわち、参加者が行動を通して原発に依存するものとは違う社会のあり方を描き出すことに置かれた。参加者を力づけるうえで重要な役割を果たすと考えられたのは、日々のミーティングである。キャンプのテント生活の中では、毎日、何度もミーティングを重ねた。谷は、次のように言う。「ミーティングではいろいろ、自分の思うところをさらけ出して話しあった。「私は体が大きかったし、男と女の差別なんて考えてこなかった」という人もいたし、「学校の出席簿も男が先、結婚したらほとんどの女が男の姓に変えている。このことだけ見ても差別の状況は明らかだ」という人もいた。女たちが自分たちの差別されている状況を先ず、認識していくこと。又、分断されている状況を知ること—このことが、女たちの運動にとってとても大事なことだと思う²⁵⁾」。核燃に反対するという点では共通する女性たちが、女性の現状の認識について各々の考え方を確認しながら、ここに相互理解を深めていく様子を見て取れる。

このようにキャンプでの話し合いは、社会的な問題だけでなく、個人的なことにまで及んだ。しばしば二人、あるいは複数の組をつくって、自分がどうして反原発運動に関わるようになったのか、自分がどういう思いでキャンプに参加しているのか、時には自分がどんな悩みを抱えているのかということを話した。たとえば武藤は、このミーティングの中で、姉の病

気や自分の恋愛についても話すことがあったと言う。誰とでもとはいかなかったかもしれないけれども、意識的にお互いがお互いのことを話す時間をつくったところにキャンプの特徴があった²⁶⁾。

参加民主主義について論じた『ストロング・デモクラシー』の中で、ベンジャミン・バーバは、「話すこと (talk)」が民主主義の要であると言う。しかしバーバによれば、話すことは一方的なスピーチではなく、「言葉と言語学上の符号を含むすべての人間の相互のやり取り」を指す (Barber 1984=2009 : 277)。そして通常のコミュニケーションよりも、政治的コミュニケーションには困難を伴う。なぜなら、そこではお金、労働力、アイデンティティのような政治的資源が争われているからである。だからこそ、強制的ではない形で争いの解決をめざす民主主義においては、話すことが重要になってくる。

バーバが強調するのは、民主主義的な話し合いにおける「聞くこと (listening)」の重要性である。話すことには、常に不平等を伴う。それは、各自の明瞭にしゃべる能力、雄弁さ、論理、レトリックの能力に差があるからである。しかし聞くことは、より相互的な技術であるがゆえに、平等を高めることにつながる (Barber 1984=2009 : 280)。聞くことは、相手の弱点を探ったり、取引を持ちかけたり、寛大に何でも好きなことを言うのを許したりすることではない。それは、自分と相手との間に共感をつくり出す行為である (Barber 1984=2009 : 279)。

スーザン・ビックフォードによれば、聞くことは、自己を相手との関係の中にさらすがゆえに、聞き手に恐怖心をかき立てる。常に自分が間違っていると否定されるかもしれない不安に悩まされるからである。話すことも、相手から無視されたり、嘲笑されたりする危険から自由ではない。複数の他者とのやり取りの中で自分がどう「現れる」のかを、完全にコントロールすることはできない (Bickford 1996 : 149)。このように、話すにせよ、聞くにせよ、コミュニケーション、とりわけ、資源をめぐる争う政治的コミュニケーションは、常に困難を伴うものである。バーバやビック

フォードにとってのコミュニケーションは、独立した人びとによって公共圏で行われることが想定されている。しかし話すことと聞くことがコミュニケーションの成功の鍵であり、コミュニケーションには常に失敗のリスクを伴うというのは、参加者の間の親密な関係をもとにした女たちのキャンプにおいても同じように当てはまるだろう。

3.2 友情が民主主義に及ぼす効果

こうしたリスクを伴う政治的コミュニケーションを円滑にするうえで、民主主義理論の研究者が注目しているのは、「友情 (friendship)」という概念である。アメリカのニューレフトやウーマンリブの事例を示しながら、フランチェスカ・ポレッタは、友情が参加民主主義に及ぼす効果について議論している。友情というのは、通常は政治とは無関係な、公の場で言及されることのない、私的なもの、非公式なものと思われる。しかしポレッタは、「非公式であることで、感情的に豊かな関係が生まれ、組織の成員の平等な構造が相互の尊敬をつくり出し、そして連帯の形成に役立つ」と言う (Polletta 2004 : 210)。相互の信頼がないところには参加も機能しないというのが、彼女の主張である。それゆえに、友情はメンバーの関わりを高め、コミュニケーションを深化させるという点で、民主主義を促す。

核燃に反対するためのテント生活は、コミュニケーションを深めるのに適した環境であったと考えられる。通常、脱原発の活動で忙しい日々を送る参加者同士の関係は、集会やデモの度に顔を合わせるというものであった。これでは会う回数こそ多いが、時間に追われる中での事務的な作業も多く、ゆっくり話をすることにはなりにくい。しかしキャンプで、アクティヴィストたちは寝食をともにしていたため、突っ込んだ話をする時間がたくさんあった。武藤は「擬似的かもしれませんが、暮らしをともにする、すなわち、食べる、寝る、テントを掃除することによって運動が日常感覚になり、親しさが増すのです」と言っている²⁷⁾。もちろん、参加者が全国各地から来ていることを考えてみても、全員が互いに顔見知りで

あったわけではない。それでも、ウランが六ヶ所村に運び込まれるのを止めたいという共通する思いが、彼女たちの関係を築く媒介になったと考えられる。菊川は、次のように語っている。「キャンプには信頼関係がありました。信頼は知り合ってから時間の長さでできるものではありません。相手を信用できる人だと思える時には、たとえ出会ってから5分でも信用できるものだと思います²⁸⁾」。

マーク・ウォーレンの編著である『民主主義と信頼 (Democracy and Trust)』では、「信頼」という概念が政府と国民との関係において論じられている (Warren 1999)。政府のような公式の政治制度の場合、人びとの政府に対する信頼が欠如していたとしても、あくまで最後の手段ではあるが、行為を強制することができる。しかし社会運動のような自発的な参加をもとにする組織の場合、強制という手段を使って行為を促すことができない。それゆえに、友情という非公式な関係から生まれる信頼に依拠するところが、より大きくなっていく。

それでは、友情に依拠した場合、社会運動の組織のあり方にいかなる変化が生まれるのだろうか。ドナテラ・デラポルタたちは、ヨーロッパのグローバル・ジャスティス運動の研究の中で、友情がグループ内のミーティングに及ぼす影響を論じている。友情は、メンバー間の関係に緊張が入るのを恐れるあまり、違う意見が出るのを妨げることがある (della Porta and Giugni 2013 : 142)。しかしリラックスした雰囲気をつくり出し、否定的な感情を持つことなく議論できた時には、合意形成がうまくいきやすいという利点がある (della Porta and Giugni 2013 : 140)。

女たちのキャンプのミーティングで注意が払われたのは、くつろいだ雰囲気づくり出すことである。会合は時に座ったり、寝転んだり、お茶を飲んだり、物を食べたりしながら行なわれた。これを言うてはいけないとか、あれを言うてはいけないということを、なるべくなくすように努めた²⁹⁾。これは、おそらく、通常の会議では決して推奨されないやり方である。各自が好き勝手に話しをしているうちに、議論が本題からそれることが起きて

しまうからである。それでもキャンプでは、会話をコントロールするのではなく、参加者の緊張をほぐすことで、意見が出やすい状況をつくり出すのを優先させた。原発について、女性の社会的位置について、様々な思いを持って六ヶ所村に集まった人びとの間で意見を交換するというのが、キャンプのミーティングのねらいだったからである。

先に論じたように、政治的コミュニケーションには、常に失敗の危険を伴う。特に公的領域の場合、男性的とされる徳性が求められるので、それが女性たちを政治的コミュニケーションから遠ざけるという効果を生んできた。この点を考慮すれば、女たちのキャンプでリラックスした雰囲気づくりが心がけられたのは、コミュニケーションと参加のハードルを下げるための工夫であると言えよう。

女たちのキャンプのミーティングのやり方のもう一つの特徴は、じっくり議論し合うことである。小木曾は、次のように語っている。「じっくりこない場合には、たとえ一度決まったことでも自分たちが腑に落ちるまで議論しました。この議論の中で、自分たちにあった方法を見つけていったのです³⁰⁾」。また菊川も、次のように言っている。「夕方のミーティングで決まったことが、翌日の朝には変わっているということがありました。決まったことを死守しない、形に捉われず、実質を大事にするのが、キャンプのやり方でした。目標に向けて、比較的無理しないのでできることを見つけていき、犠牲が大き過ぎたら、それはやめることにしました³¹⁾」。

これらの言葉からキャンプでは意思決定の単位が参加者個人に置かれていたことがわかる。小木曾は、こうした組織の形を「パッチワーク的」と表現している。「各自がそれぞれの色を主張し、それをパズルのように組み合わせ合わせて一枚の絵をつくる」のが、女たちのキャンプの組織の形である³²⁾。核燃施設前の座り込みのようなりスクを伴う行動には、各々の状況に応じて参加の仕方を決めた。たとえば、子連れの人には座り込むことができないので、道ばたでキルトを縫うことにするといったように、他の参加者と話し合いながら、最終的には自分のことを自分で決定したのである。メンバー

のそれぞれが納得のいくまで話し合うことには、最後に決めた行動に対するコミットメントを高めるというメリットがあった。なぜなら、話し合う過程で自分の行動の意義とそれを実践する最善のやり方について考えをめぐらせるからである。

決定事項を翻してまで議論し続けるというのも、社会運動やその他の会議の中で一般に勧められるやり方ではない。もしこのやり方で意思決定をしたら、まず何より、会議に時間がかかることが想定される。効率的とは、決して言えない。そして、決定の翻りに異議を唱える人が出てきて、グループ内に亀裂が走ることも考えられる。したがって、このような決め方が、すべての場合に適切であるとは思えない。それがキャンプの中で機能したのは、メンバーの間に「友情」、すなわち、公式な関係を越えた相互の信頼があったからであるということを確認しておこう。

4. 依存, 気づかい, 直接行動

4.1 依存の政治理論

友情が女たちのキャンプに及ぼした影響を、もう一つ指摘することができる。それは、その存在がキャンプのメンバーの間における「依存」の許容につながったということである。依存という概念は、近年、ケアの政治理論の中で注目されている。理論研究の成果を踏まえながら、この概念について整理しておこう。ヴァージニア・ヘルドによれば、ケアの倫理において何よりもまず重要なのは、他者のニーズを満たすことである。そこには、人間は誰かに依存することなしには生きていけないという基本的な前提がある (Held 2007: 10)。誰もが誰かに依存して生まれ、誰かに依存して大きくなり、病気になったりケガをしたりすれば誰かに依存して治療とリハビリをし、年老いてからは誰かに依存する程度が高まるのが普通である。

この他者への依存ということが、古典的な政治学では十分に考慮されてこなかった。たとえば政治思想の伝統では、ケアは政治以前のものとして

軽視されてきた。ケアのような人間の活動に必要なものは、政治を行なううえで的前提であり、公的領域で議論されるべきものではない (Tronto 1996:140)。そしてケアのように人びとの個別のニーズに応える営みは、狭く限定された問題であり、政治はこの個別性を超えたところに存在する (Tronto 1996 : 141)。岡野が指摘するように、政治思想の中では人間が他者に依存しているという事実が覆い隠され、「主体の自律性」を暗黙の前提としたうえで、政治なるものが論じられてきた (岡野 2013 : 127)。

「生活保護バッシング」に示されるように、他人に頼ることはできる限り避けるべきという規範が根深く存在する現在の日本社会で、他者への依存と聞くと悪いイメージを浮かべてしまうかもしれない。しかしケアの政治理論には、人間が誰も他者に依存して生きていることを再確認しながら政治的な倫理を組み立てていこうという考え方が基本にある。ケアという言葉には、「気づかう」という意味がある。子ども、老人、病人を気づかい、彼らのニーズを満たすには、一人ひとりの状況を丁寧に見ながら、それに応じた対処をしなくてはならない。それゆえに、ケアの政治理論には、抽象的ではなく具体的な人間関係を重視するという特徴がある (Held 2007 : 11)。

女たちのキャンプの中で参加者の間にパーソナル・ヒストリーや各々の悩みについての会話が交わされていたことにわかるように、そこでは他の参加者との対面的な関係が構築され、そしてお互いへの依存が認められる雰囲気が存在した。これは参加者が人としての「弱さ」を隠さずに表わすことを可能にした。すなわち、自分が完ぺきな人間ではないということを認め合い、そんな「弱い」一人ひとりがお互いを支え合うような関係をつくり出すことにつながったのである。武藤は、次のように書いている。「その場は、自分のマイナス面をふくめて、ありのままの自分を安心して出していける場所だったような気がします。誰かのマイナスを誰かがおぎない、モザイクのように組み合わせりながら、ひとりひとりがかけがえのない存在になっていたのだと思います³³⁾」。

ここで注意すべきは、参加者の「弱さ」が許容されるだけでなく、より肯定的なものとして捉えられているという点である。先の言葉に、武藤は次のように続ける。「どんよりとくもった夕暮れ近い道を、パトカーのチカチカと光る赤いランプとともに六フツ化ウランを積んだ何台ものトレーラーが近づいてくる光景を見た時に「とうとうこの土地も放射能にまみれてしまうんだ」と胸がつぶれるようで、思わずおいおいと泣いてしまいました。しかし、同じように道路に座り込んで排除され泣いていた女たちは、ひと泣きし終えるとまた立ちあがり道路へすわることを、何度も何度もくりかえしていました。「自分の中の弱さを出せるから、だから強くなれる」これが女のやり方なんだなとつくづく思いました³⁴⁾」。

島田も、カウンセリングの手法を取り入れたキャンプ内の話し合いに言及しながら、感情の解放が「強さ」につながると語っている。日常では、怒りや悔しさの感情は、押し殺すのが普通であり、特に男性は、泣くことを許されない。その感情を自然に表現することで、詰まったものを解放し、それによって自分の力を取り戻すことができる³⁵⁾。島田が指摘するように、通常、男性的な徳性が支配する公的な関係では、「泣く」というのは好ましい行為ではない。しかし泣いて感情を解放した時、六ヶ所村へのウランの搬入を止めたいという思いを再確認し、自分の行動の根拠がより確固としたものになる。これが「弱さ」が抵抗の「強さ」につながるということの意味である。このように、キャンプにおいて抵抗の力の源泉は、その内部で依存が許容され、自分の中の「弱さ」をさらすことができるような関係が存在する点にあった。

4.2 非暴力トレーニングと気づかい

強風でテントが飛ばされるなどのトラブルにも見舞われたが、キャンプ生活は概ね順調であった。しかし六フツ化ウランの搬入計画も着々と進行し、六ヶ所村にウランが運ばれる日が近づいてきた。その日に備えて、「非暴力トレーニング」、すなわち、非暴力直接行動の事前の練習が行なわれた。

直接行動をするのは、それが他に政治的な選択肢がなくなった中でできる最後の抵抗の方法であり、それと同時に核燃サイクル計画を止めたいという自分たちの思いを表現する最適の方法であるという考えからであった。谷は、次のように言っている。「非暴力行動には、ガンジー以来の歴史がある。弱い者が行動するには、これしかない。暴力を使うと、相手と同じになってしまう³⁶⁾」。

非暴力トレーニングについては、日本の社会運動の中でも1970年代からの蓄積があった。アメリカの事例に学んだ阿木幸男によって書かれた『非暴力トレーニング—社会をひらくために』(野草社、1984年)という本のように、非暴力直接行動に関する書物が出版されており、キャンプの中ではこれらの本を回し読みながら、その基本的な考え方を共有した³⁷⁾。キャンプの参加者の中には、このトレーニングを以前に受けたことがある者もいて、彼女たちが提案する形でキャンプにトレーニングが導入された。トレーニングでは、警察との直接対峙した時の振る舞い方が訓練されている。元警官のトレーナーがロールプレイで警官役を担い、本番さながらのトレーニングが繰り返され、他にも実践的なトレーニングが続いた。騒ぎになった時、誰が中に入って、逮捕されないようにするのかについての話し合いがその一例である。警官に排除されそうになった時、力を抜くことで体の重みを感じさせる練習をしたりもした³⁹⁾。

さらに、警官にわからないように、複数の歌を用意して、それを座り込みのような行動の合図にすることも、事前の準備の中に含まれていた⁴⁰⁾。歌を合図にするというのは、単なる警察対策以上の意味があったと考えられる。菊川は、「警察と対峙する時は、興奮状態になりやすい」ので、「それを抑え、混乱を回避し、普通の状態で自分の思いを伝える」ための「小道具」が「花と歌」であったと語っている⁴¹⁾。直接行動と言っても、警察との対決を自己目的にすることではない。それでも否応なく警察と対決を強いられてしまう時には、緊張、恐怖、興奮で行動の目的を見失い、他の参加者への気づかいを忘れてしまいがちである。そこで自己と他者への気

づかいを促すため、非暴力直接行動の中に歌が取り入れられた。

ここに示されるように、非暴力トレーニングの主たるねらいには、運動の中のコミュニケーションづくりがあった。先に触れた本の中で、阿木は、非暴力直接行動のねらいについて、こう言っている。「お互いの人格を尊重し、積極的にお互いの良さを認め合い、仲間同志の信頼感を強くしながら、さまざまな社会問題の糸口を見つけ出し、非暴力行動を実践し、非暴力的な生き方をしていくこと」(阿木 1984 : 8)。阿木の本の対談中で、早い時期から非暴力トレーニングに参加していた水田風(戦争抵抗者インター日本部)は、初めてセミナーを受けた時、非暴力行動と聞いて、「ガンジーの座り込みをイメージして、「殴られてもやわらかく受け止める方法」とか、「骨の折れない殴られ方」とかを教えてくれるのだらうと思って、喜び勇んで参加したら、「全然違った」という笑い話をしている(阿木 1984 : 259)。阿木自身が書いているように、非暴力トレーニングの中で運動内の信頼関係の構築に力点が置かれているのは、過去の運動が残した負の遺産に対する反省から来ている。「デモや集会で友人たちが傷つき、内ゲバやリンチが頻繁に起き、各セクトがぶつかり合うにつれ、僕自身はむなしさや割り切れないさを覚えるようになっていった」(阿木 1984 : 14)。このように、社会を少しでも良くしようとする活動する人びとがお互いに傷つけ合うことがないように、非暴力トレーニングが組織された。1960～70年代のニューレフト運動において、弱者の政治的表現であるはずの直接行動は、他者への攻撃性を伴うものに転化した(安藤 2013 : 107-111)。女たちのキャンプの直接行動は、こうした過去の運動が直面した難題に対して、気づかいと抵抗の強さを兼ね備えた直接行動のあり方を提示したのである。

付記しておくべきは、女たちのキャンプの中で、この気づかいは、警察にまで向けられていたということである。たとえば菊川は、「お巡りさんも人間だから、いやなことを言われたら、むっとくるだろう」と言っている。1節で言及したように、原発の誘致は六ヶ所村の住民を推進派と反対

派に二分し、お互いが傷つけ合うという経験をしてきた。核燃への抗議行動を警備する警察の中には、地元出身者が含まれることもある。ここでも原発地は、引き裂かされ、対立させられている。対立の境界線の向こう側にも気づかいを向けるのは、地元で暮らし、原発のつくり出す分断をよく知っている菊川ならではの言葉であろう。こうした現地の対立構造への理解は、菊川だけのものではなく、キャンプの参加者の多くに共有されていたので、その気づかいは運動の内側だけでなく、より広い人びとに向けられていた。

4.3 六ヶ所村にウランが入った日

1991年9月27日、ウランが搬入された日の『デーリー東北』の記事を追ってみよう。ウラン濃縮工場の正面ゲート前で、市民グループや労働団体が相次いで抗議集会を開き、それぞれ30名ほどの参加者であった。原料が搬入される南ゲート前では、約25名の女性が午前10時から自作の抗議の歌や踊りを繰り返し非暴力の直接行動に訴えた。原料搬入の約1時間前の午後3時頃、女性たちは応援に駆けつけた反対派住民約50人とゲート前で座り込みを開始した。エンジン内の路上に野花と折り鶴を敷き詰めながら抗議の合唱をする。警備の警官は一斉に排除を始める。女性たちは数人がかりの警官に道路わきに引きずり出されるが、次から次へと路上に戻っていく⁴²⁾。

直接行動に加わった人びとの中には、「乳のみ児2人、ヨチヨチ歩き1人の子を連れた人1人、妊娠している人1人」が含まれていた。1歳4カ月の子どもを抱いたKさんは、若い警官にトレーラーの前に行かないようにと約束させられる。かまわずトレーラーの前に出ると、その警官は「核燃止める前に車にひかれたらなんにもならないじゃないですかァ！」と叫んだ。妊娠8ヶ月のHさんは、警察に排除されようとした時、そこに落ちていた花をふわりと警官の前に差し出した。その警官は思わず身を引いたそうである⁴³⁾。このようなやり取りが直接行動の中で繰り返された。

KさんやHさんの行動は、それを取り締まる警官の心にまで反響を生み出したことがうかがえる。これは、政治的コミュニケーションとしてのキャンプの直接行動が及ぼした影響を示している。

女性たちの非暴力直接行動は、トレーラーを約30分間、立ち往生させた。しかし午後5時には、一連の攻防に決着がつき、1台目のトレーラーがゲート内に入った。その後はスムーズに事が進み、残りのトレーラーも次から次へと施設の中に入っていった。こうして9月27日の直接行動は、幕を閉じた。

おわりに

私の取材した1991年六ヶ所村女たちのキャンプに参加した人びとの多くが、キャンプの経験と自分の現在とのつながりを意識している。福島第一原発事故が起きた後の2011年10月27～29日、「原発いらぬ福島の人たち」が、政府に原発の撤廃を求めて、東京霞ヶ関の経済産業省前で座り込みを行なった。この行動にかつて女たちのキャンプを経験した人びとも参加し、行動を終えてからも旧交を温め合い、さらなる活動の継続を誓い合った。キャンプの記憶、そしてそこで培われた思想とネットワークは、現在進行中の脱原発運動においても生きている。

本稿のねらいは、最近の民主主義論の成果を用いながら、キャンプの実践を読み解くことにあった。女性的な徳性の否定的な理解を読みかえ、脱原発の思想を練り上げること。公式の関係を越えた友情という資源を利用しながら、より深い政治的コミュニケーションをつくり出すこと。非暴力直接行動の中に、他者への依存の許容と気づかいを組み込むこと。これが女たちのキャンプで実践された民主主義に不可欠なものであった。世界各地で現存する民主主義体制への不満が爆発し、選挙での投票率が低下し、「民主主義の赤字 (democratic deficit)」が叫ばれている (Norris 2011)。こうした状況の中で、女たちのキャンプの試みは、投票を通しての代表の選

出に限定されない、男性的な徳性が支配するものとは異なる民主主義のあり方を示している。

以上を踏まえたうえで、参加者自身が女たちのキャンプのやり方をいかなる場合にも応用可能と考えていたわけではないことを付記しておこう。たとえば菊川は、キャンプの物事の決め方が、「あのキャンプだから、短期間の目標だからできたことである。運動ということではいろいろな人たちが関わってくると、方針を決めたらそこを崩すならば、もう一度みんなで話し合わなくてはならない⁴⁴⁾」と言っている。

キャンプという非日常だからこそ、現在の政治や経済社会とは異なる行動やコミュニケーションの形を表現できた。これをより幅の広い人びと(そこには核燃サイクルに反対ではない者も含まれる)から構成される日常にどう接続できるかというのは、別な課題である。たとえばアメリカのニューレフトやウーマンリブの影響を受けたグループの中では、組織内の合意形成の仕方に関して、友情に支えられる非公式の関係に依拠するだけでなく、公式の規則との間に接点を探ることで、より開かれた組織をつくり出すような試みが出てきている(Polletta 2004:199-200)。しかしポレッタが指摘するように、規則と関係を制度化すればすむのかと言えば、事はそう単純ではない。参加者の関係に信頼、尊敬、配慮がなければ、民主主義は機能しないからである(Polletta 2004:210)。女たちのキャンプの事例が示しているのは、友情、依存、気づかいなくして、深い民主主義は存在し得ないということである。

それと関連して、地元とのつながりを十分に築くのが難しかったというのも、キャンプの参加者が振り返るところである。すでにウランが濃縮工場に搬入される時期に、地元住民が核燃サイクル計画をめぐる分断と争いに疲弊していたというのは、この原因の一つであろう。地元とのつながりというのは、女たちのキャンプより以前からの課題でもあった。1991年の青森県知事選の当時から地元の運動に関わっていた小木曾は、県外者が地方の首長選挙に首を突っ込むことについて、県内の人たちから反発が

あったと振り返っている。「この重大な時に、全国的な運動と県内の人びととの思いをどこでどう交叉させ、何が本当の力になるのかということと互いの立場を理解し合い、方向を出していくということができなかったことについて痛恨の思いをもって今、私はこの選挙を振り返っている。この選挙の敗北は全国の脱原発運動の敗北であったと私は思わずにはいられない⁴⁵⁾」。この都市と現地の運動をどうつなげるかというのは、核燃への反対運動だけでなく、もう少し広く、「ニューウェーブ」の運動が直面していた課題だと言わなければならない。町と村との分断を越える政治的コミュニケーションをつくり出すというのは、女たちのキャンプの後に残された、もう一つの課題である。

註

- 1) 菊川慶子「女たちは歌いながら座りこんだ」『反原発新聞』1991年10月20日号, 1面.
- 2) 清水正登「ドキュメント・「反核燃の日」」『技術と人間』1989年5月号, p. 52.
- 3) 『デーリー東北』1988年11月23日, 17面.
- 4) 清水正登「農業者に広がる“核燃施設反対”」『技術と人間』1989年1月号, pp. 41-42.
- 5) 『東奥日報』1990年10月2日, 2面.
- 6) 『東奥日報』1988年12月8日, 1面.
- 7) 『毎日新聞』1993年12月29日, 21面.
- 8) さいどまさのり「雪の中の二つの選挙—反核燃・津軽のたたかい!」『月刊ちいきとうそう』1991年4月号, p. 19. 津村浩介「91年青森県知事選を考える—社会党青森県本部は本当に核燃を止めるつもりがあるのか?!」『技術と人間』1991年4月号, pp. 36-37.
- 9) 津村「91年青森県知事選を考える」, p. 20.
- 10) 同上, pp. 32-35.
- 11) 『東奥日報』1991年9月11日, 2面.
- 12) 『東奥日報』1991年9月27日, 1面.
- 13) 小木曾茂子氏インタビュー, 2011年10月6日.
- 14) 関根秀夫「厚い熱い7日間の六ヶ所村のまつり」『げんこくだん』1991年9月15日, p. 10

- 15) 1988年の祭りに関しては、(ONE LOVE Jamming 1990)を参照のこと。
- 16) 谷百合子氏インタビュー，2012年12月17日。
- 17) 『デリーー東北』1991年9月11日，1面。
- 18) 小木曾茂子氏インタビュー，2011年10月6日。
- 19) 菊川慶子氏インタビュー，2013年6月21，22日。
- 20) 武藤類子氏インタビュー，2013年3月14日。
- 21) 同上。
- 22) 島田恵氏インタビュー，2013年10月4日。
- 23) 小木曾茂子氏インタビュー，2011年10月6日。
- 24) 谷百合子「こないでウラン！核燃いらない！女たちのキャンプ参加記」『六ヶ所村にウランが入った日ー北海道から行った座ったトレーラー止めた』六ヶ所村を考える札幌の会，1991年，p. 8。
- 25) 同上，p. 8。
- 26) 武藤類子氏インタビュー，2013年3月14日。
- 27) 同上。
- 28) 菊川慶子氏インタビュー，2013年6月21，22日。
- 29) 武藤類子氏インタビュー，2013年3月14日。
- 30) 小木曾茂子氏インタビュー，2011年10月6日。
- 31) 菊川慶子氏インタビュー，2013年6月21，22日。
- 32) 小木曾茂子氏インタビュー，2011年10月6日。
- 33) 武藤類子「『核燃とめたい女たちのキャンプ』から」『うつぎ』1991年10月15日号，p. 4。
- 34) 同上，p. 5。
- 35) 島田恵氏インタビュー，2013年10月4日。
- 36) 谷百合子氏インタビュー，2012年12月17日。
- 37) 同上。
- 38) 天野雅智「非暴力直接行動の画期としての9月27日」『六ヶ所村にウランが入った日ー北海道から行った座ったトレーラー止めた』六ヶ所村を考える札幌の会，1991年，p. 18。
- 39) 谷「こないでウラン！核燃いらない！女たちのキャンプ参加記」，p. 5。
- 40) 武藤類子氏インタビュー，2013年3月14日。
- 41) 菊川慶子氏インタビュー，2013年6月21，22日。
- 42) 『デリーー東北』1991年9月28日，15面。
- 43) 谷「こないでウラン！核燃いらない！女たちのキャンプ参加記」，p. 6。
- 44) 菊川慶子氏インタビュー，2013年6月21，22日。
- 45) 小木曾茂子「青森県知事選参院補選をふり返って」『月刊ちいきとうそう』

1991年4月号, p. 24.

日本語文献

- 明石昇二郎, 1991, 『六ヶ所「核燃」村長選—村民は“選択”をしたのか』新泉社.
- 阿木幸男, 1984, 『非暴力トレーニング—社会を自分をひらくために』野草社.
- 安藤丈将, 2012, 『社会運動のレパトリーと公共性の複数化の関係—「社会運動社会」の考察を通して』『相関社会科学』22: 3-21.
- 安藤丈将, 2013, 『ニューレフト運動と市民社会—「六〇年代」の思想のゆくえ』世界思想社.
- 岡野八代, 2012, 『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房.
- 甘蔗珠恵子, 1987, 『まだ、まにあうのなら—私の書きたいちばん長い手紙』地湧社.
- 菊川慶子, 2010, 『六ヶ所村ふるさとを吹く風』影書房.
- 木村良一, 1998, 『青森県知事選挙』北方新社.
- 長谷川公一, 1991, 『反原子力運動における女性の位置—ポスト・チェルノブイリの「新しい社会運動」』『レヴァイアサン』8: 41-58.
- 船橋晴俊・長谷川公一・飯島伸子, 2012, 『核燃料サイクル施設の社会学—青森県六ヶ所村』有斐閣.
- 船橋晴俊・長谷川公一・飯島伸子編, 1998, 『巨大地域開発の構想と帰結—むつ小川原と核燃料サイクル施設』東京大学出版会.
- 本田宏, 2005, 『脱原子力の運動と政治—日本のエネルギー政策の転換は可能か』北海道大学図書刊行会.
- 三輪妙子編, 1989, 『わいわいがやがや女たちの反原発』労働教育センター.
- ONE LOVE Jamming, 1990, 『NO NUKES ONE LOVE—いのちの祭り '88 Jamming Book』プラサード書店.

英語文献

- Barber, Benjamin R., 1984, *Strong democracy : participatory politics for a new age*, Berkeley : University of California Press. (= 2009, 竹井隆人訳『ストロング・デモクラシー—新時代のための参加政治』日本経済評論社.)
- Butler, Judith, 1990, *Gender trouble : feminism and the subversion of identity*, New York : Routledge. (= 1999, 竹村和子訳『ジェンダートラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Bickford, Susan, 1996, *The Dissonance of Democracy : Listening, Conflict, and Citizenship*,

- New York : Cornell University Press.
- Cook, Alice and Gwyn Kirk, 1983, *Greenham women are everywhere : dreams, ideas and actions from the Women's Peace Movement*, Massachusetts : South End Press. (= 1984, 近藤和子訳『グリーナムの女たち—核のない世界をめざして』八月書館.)
- della Porta, Donatella, 2013, *Can Democracy be Saved : Participation, Deliberation and Social Movements*, Cambridge; Manchester : Polity.
- della Porta, Donatella and Marco Giugni, 2013, "Emotions in movements" in Donatella della Porta and Dieter Rucht (eds.), *Meeting Democracy*, New York : Cambridge University Press : 123-151.
- Held, Virginia, 2007, *The Ethics of Care : Personal, Political, and Global*, Oxford; New York : Oxford University Press.
- Mansbridge, Jane, 1996, "Using Power/ Fighting Power : The Polity" in Seyla Benhabib (ed.), *Democracy and Difference : Contesting the Boundaries of the Political*, New Jersey : Princeton University Press : 46-66.
- Mies, Maria and Vandana Shiva, 1993, "Introduction : Why we wrote this book together" in Maria Mies and Vandana Shiva, *Ecofeminism*, Nova Scotia; London : Zedbooks : 1-21.
- Norris, Pippa, 2011, *Democratic Deficit : Critical Citizens Revisited*, Cambridge ; New York : Cambridge University Press.
- Phillips, Anne, 1991, *Engendering Democracy*, Cambridge : Polity.
- Polletta, Francesca, 2004, *Freedom is an Endless Meeting : Democracy in American Social Movements*, Chicago : University of Chicago Press.
- Shiva, Vandana, 1993, "Women's indigenous knowledge and biodiversity conservation" in Maria Mies and Vandana Shiva, *Ecofeminism*, Nova Scotia; London : Zedbooks : 164-173.
- Tronto, Joan C., 1996, "Care as a Political Concept" in Nancy J. Hirschmann and Christine Di Stefano (eds.), *Revisioning the Political : Feminist Reconstructions of Traditional Concepts in Western Political Theory*, Colorado : Westview Press : 139-156.
- Warren, Mark E. (ed.), 1999, *Democracy and Trust*, Cambridge ; New York : Cambridge University Press.
- Young, Iris Marion, 1995, "Polity and Group Difference : A Critique of the Ideal of Universal Citizenship" in Ronald Beiner (ed.), *Theorising Citizenship*, Albany : State University of New York Press, 175-207. (= 1996, 施光恒訳「政治体と集団の差異—普遍的シティズンシップの理念に対する批判」『思想』867 : 117-142.)

謝辞 : 本稿には、科学研究費補助金「チェルノブイリ事故以降の日本の脱原発運動から見る市民社会と民主主義」(課題番号 25885075) の支援をい

いただきました。また、藤井達夫さんと小須田翔さんには、草稿に貴重なコメントをいただきました。記して御礼申し上げます。